

かまにし

第68号

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
編集 地域情報紙編集委員会

ご存知ですか？

女塚神社の絵画



西蒲田六丁目鎮座する女塚神社の二階会議室に入る玄関に一枚の絵(一二〇×九四センチ)が掛けられています。

この絵はアイヌの女性の盛装を描いて、額縁は画家の矢沢正文氏がアイヌの紋様にヒントを得てデザインしたものをはめこんであるそうです。

絵をご覧になりたい方は、社務所にお声かけすれば、見ることが出来ると思います。

この絵は以前女塚神社の管理人を長く務めた松本青山さんが描いた作品であり、青山さんはかつて巨匠、伊東深水の家に住み込んで家事等を手伝いながら修行する

(内弟子)として可愛がられ、日展・院展などに出品されていたそうです。

インターネット等で検索しても伊東深水の弟子(門人)としては見当たりません。当時を知る方にお話を伺うと、近隣の子供たちに絵を教えていたようですが、この絵のいきさつなど、詳しいことは分かりません。

ご存知のように伊東深水(一八九八—一九七二)は浮世絵師・日本画家・版画家であり、本名は伊東一(はじめ)、芸術院会員でした。女優・タレント・歌手の朝丘雪路さんは実娘です。

歌川派浮世絵の正統を継いでおり、日本画独特のやわらかな表現による「美人画」が有名でした。人気の美人画以外の画題を描きたくても、それ以外の依頼が来ないため、画家として困惑した時期があったといわれています。

本妻の好子さんをモデルに大作を数多く発表しています。戦後は美人画のほかに独自の題

材で日本画を制作され、人気のあまり、多くの作品が複製版画として頒布されるようになったそうです。

女塚神社について、少し触れておきます。元は旧女塚村・御園村の鎮守として、現在のJR蒲田駅東口付近に鎮座していた八幡社でした。創建年代は不詳ですが、新編武蔵風土記には慶長一九(一六一四)年落成の記述があり、この頃の創建と考えられています。

明治五(一八七二)年、新橋—横浜間の鉄道敷設に伴い、その用地として収容され、明治二一(一八八八)年に現在地に遷座して女塚神社と改称されました。ちなみに旧御園村の鎮守は御園神社が担うことになったのだそうです。

今年の女塚神社の祭礼は本祭で七月二八日(土)・二九日(日)に、御園神社の祭礼は陰祭で七月二一日(土)・二二日(日)に、それぞれ執り行なわれます。

(取材 伊藤・下山・飯嶋委員)

出張所の移転

蒲田西特別出張所は七月三十日(月)から、大田都税事務所1階(大田区西蒲田七丁目11番1号)

わがまちの顔

ママさんバレー全国大会優勝

さいとう 齋藤 洋子せん



本誌掲載写真を撮影の為、水曜

の午後八時過ぎ安方中学校を訪ねました。体育館に近づくにつれ、ボールを打つ音が響いてきます。ドアを開けると、二十名を超えるママさんたちの、元気いっばいに動き回る姿が目飛び込んできました。中でも、ひときわ目につくユニフォーム姿が「わがまちの顔」齋藤さんでした。ただいま五十八歳、身長は百七十一センチ。

齋藤さんは蓮沼駅近くに住み、長年地域のママさんバレーに取り組んでいます。

お母様のママさんバレーに、小学生の頃から付いて行ったのがバレーボールとの出会いのこと。

背が高く運動も得意だったので、全国大会常連校の、八王子実践高等学校に進学、全日本高校バレーボール選手権大会にも出場しました。

三十歳の頃にバレーを再開し、以来二十八年間、三回の骨折など多くの怪我を乗り越え、バレーを続けてきました。

大田区には多くの小中学校にママさんバレーチームがあり、区全体では約百三十もの数になるそうです。

その中で、全国大会参加を目指す仲間が区内七チームから集まり、「SS★9(エスエス・ナイン)」を結成、一年間、週一回の練習と練習試合で腕を磨いてきました。

メンバー全員が五十歳になったのを機に、ママさんバレーの全国大会「五十路大会」にエントリーしました。メンバーには中学の同

へ一時移転します。電話番号・FAX番号の変更はございません。ご不便をおかけしますが、よろしくお願いいたします。

「かまにし17」をお読みいただき、ありがとうございます。情報紙に対する「意見や感想、または投稿など」ございましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七二二一七
電話 3732・4785

蒲田西特別出張所管内

人口	男	32,372人
	女	29,942人
	計	62,314人
世帯	35,391世帯	

平成30年5月1日現在

級生やバスケ、新体操からの転向者もいます。その中でまとめ役の主将も務めました。

平成二十二年出場した「東京都大会」を勝ち抜き、愛知県での全国大会でも優勝することが出来ました。決勝戦の相手はKIRISHIMAという鹿児島県のチームでした。

生涯スポーツとして盛んになったママさんバレー。競技は九人制で「家庭婦人年齢制限無し」、「五十歳以上」、「六十歳以上」の三つの競技大会に分かれています。クラブチーム数が多いため、一生に一度しか参加できない部門もあるそうです。

現在、齋藤さんの所属するママさんバレーチームは、母校の安方中学校体育館等を中心に活動しています。また、所属チーム以外に、矢口地区のチームもコーチしています。

「周囲の先輩たちを見習い、八十歳までは現役を続けていきたい」と話す齋藤さん。

健康で末永くバレーボールを続けられますように！
(取材 伊藤・池田・永山委員)

暴れ川がへつした河岸の同じ地名

多摩川河岸物語②

リバーとライバル

「我田引水」「水争い」「水かけ論」「水に流す」など、水に関係した慣用語は多くあります。それだけ「水」というものは私たちの生活に身近でありながら、生存に深くかかわった存在であるといえます。

治水、利水の問題は人類が川のほとりに定着して農耕生活を開始すると同時に起こっています。古代文明は、すべて大河の流域に起こりました。氾濫や洪水を予見するために天文学が発達し、土木工事のための科学、測量技術が進歩しました。度量衡の単位の統一が行われ、立地争いや、富の分配をめぐる権力争いが起こり、治めるものと治められるものに分化しました。政治の「治」（おさめる）が「さんずい」であるのもうなずけます。

ガンジスやインダスはサンスクリット語の「川」の意味であり、「ナイル」はアラビア語の「川」の意味だといえます。ということ

は「ガンジス川」や「ナイル川」は「川の川」の意味となります。

「ライバル」という言葉の語源は「小川」を意味するラテン語に由来し、元々は「同じ川のそばに住む者」「川を共同で使う者」という意味だといえます。そこから「同じ川（水源、使用権）をめぐる争う人々」という意味で使われるようになりました。

多摩三郡の行政移管

話を多摩川に戻します。1871年（明治4年）の廢藩置縣により、多摩三郡（北多摩・南多摩・西多摩）は神奈川県に所属することになりました。これは、当時の神奈川県知事、陸奥宗光が「多摩地区は横浜の在留外国人の遊歩地区だから」と上申したからだといわれています。ちなみに多摩東部は豊島区と合わせて豊多摩と呼ばれ、東京都に属しました。

1653年（承応2年）に玉川兄弟によって羽村から取水され、武蔵野台地を開削し、マラソンのコースより少し長い4.3kmを引

直線化されたため、同じ地区なのに対岸に飛び地ができることがあります。武蔵国と相模国の境を流れる境川は高尾山の南、城山湖付近を水源とし片瀬江ノ島で相模湾に注いでいますが、上流から中流にかけては東京都町田市と神奈川県相模原市の間を小刻みに蛇行しながら流れています。

流域の市街化が進み、蛇行した流路を直線化する改修工事が行われた結果、お互いに対岸に無数の飛び地ができてしまい、その数は一時二百ともいわれました。ごみ収集・水道・通学などで不便なため、両市の間で行政換地作業が行われていますが、古くから住み慣れた住民の土地、名称への愛着、こだわりなどがあつて簡単にはいかないようです。

連続堤防のない村々

多摩川が現在のような流路に近くなったのは、1590年（天正18年）の大洪水によるといわれています。それ以前は南北朝時代の新田義興（1331〜158）伝承『太平記』や平賀源内の『神

靈矢口渡』に見られるように、かなり内陸側を曲流していました。当時の流路は新田神社（矢口一丁目）の裏から妙連塚二体地蔵（下丸子二丁目）の間にかけてだとい

われていて、現在もそれを偲はせる段差が残っています。多摩堤通り沿いにある光明寺池（鶴の木一丁目）はかつての多摩川の流路跡である河跡湖だといわれています。現在は高い堤に囲まれて表からは見ることができないのが残念です。多摩川流域の歴史年表を見ると近世以降もほぼ毎年のように氾濫・洪水を繰り返していたことがわかります。下丸子村も江戸時代初期は川崎側の橋樹郡に属していましたが、17世紀半ばからは荏原郡となっています。当時は村の規模も小さく流域は氾濫原で、人家の近くだけに霞堤と呼ばれる断続堤防が築かれているだけでした。

多摩川右岸（川崎側）の村々では、明治中期以降、多摩川改修問題について政府に対して繰り返し請願を行ってきました。中でも橋樹郡御幸村から中原村にかけての一部は無堤防となっていたため、1883年（明治16年）以来、幾度も新堤築造を出願しましたが、許可が下りないまま歳月を重ねていきました。

（取材 多田（鉄）委員）

てきた玉川上水は、江戸から明治と名前を変えた後も、東京府民の大切な飲用水として使われ続けてきました。しかし、消毒されずにそのまま配水されていたため、1886年（明治19年）にコレラが大流行し、約一万人が死亡しました。これがきっかけとなって、1898年（明治31年）に淀橋浄水場が建設され、ろ過し消毒された衛生的な近代水道が木樋に代わって鉄製の水道管で配水されるようになりました。現在、淀橋浄水場跡は新宿副都心の超高層ビル群に変貌を遂げています。

1893年（明治26年）、多摩三郡は神奈川県から東京府に行政移管されましたが、これは帝都の水源である多摩川や玉川上水を東京府の管理下に置く必要があるためだとされています。しかし、実際は自由民権運動の中心地域であった多摩地区の自由党の地盤を分断、解体するためだったともいわれています。当時、政府は日清戦争（1894〜95）に向けて軍備増強予算を組むつもりでしたが、自由党の支持層は産業振興予算を組むべきだとして、政府と対立していました。

多摩川の両岸に同じ地名

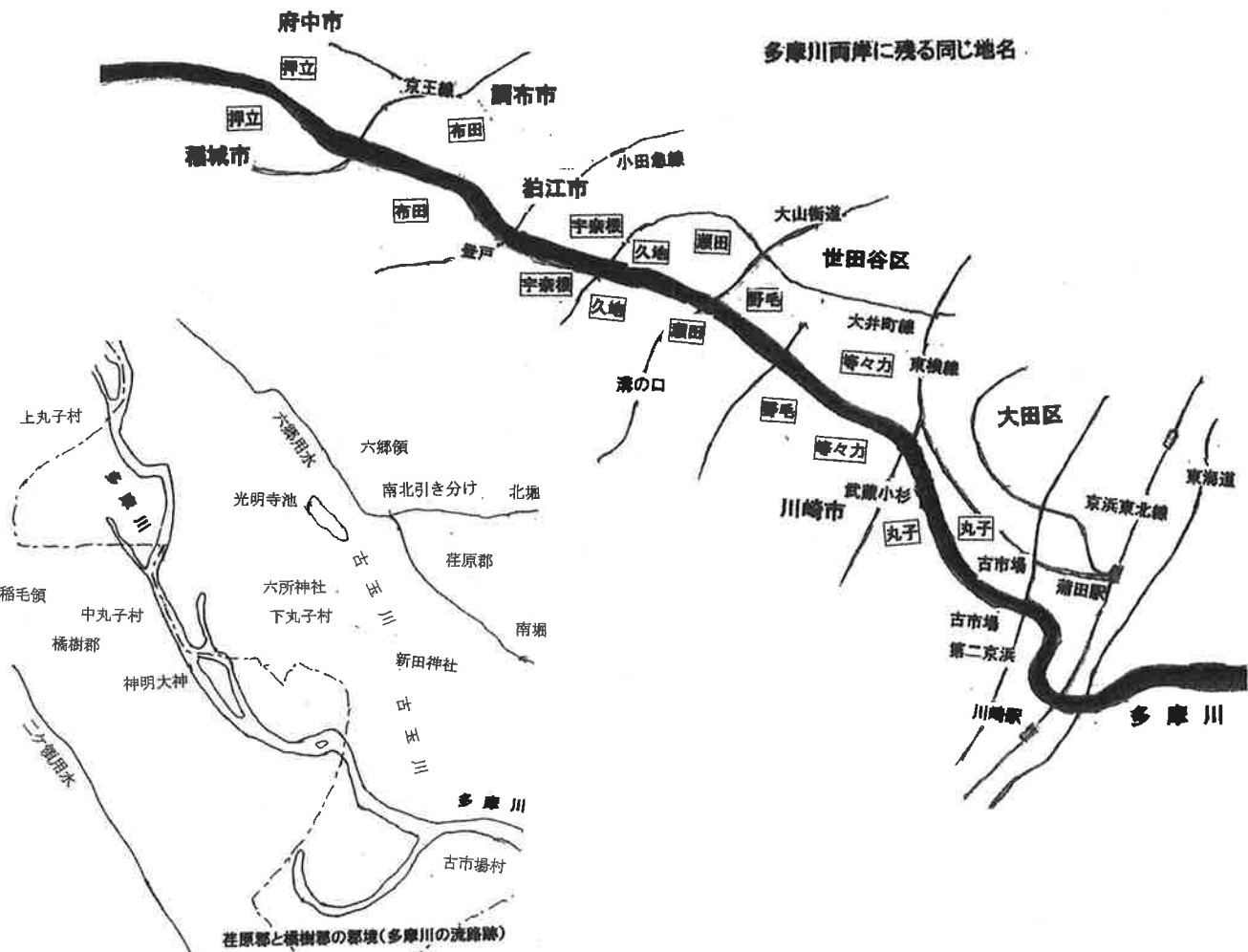
多摩川の中流から下流域には、

両岸にまったく同じ名前の地区が多く存在します。例えば押立（府中市と稲城市）、布田（調布市と川崎市多摩区）、和泉（狛江市と多摩区）、宇奈根（世田谷区と川崎市高津区）、久地（世田谷区と高津区）、瀬田（世田谷区と高津区）、野毛（世田谷区と高津区）、等々力（世田谷区と川崎市中原区）、丸子（大田区と中原区）、下沼部（大田区と川崎市中原区）、古市場（大田区と川崎市幸区）などです。ただし久地・下沼部・古市場の左岸（東京側）の地名は町名変更によって、現在は消えてしまいました。

多摩川の両岸に同じ地名が残っていることの原因はいくつか考えられますが、その最も大きな原因として、多摩川の氾濫によって流路が変わってしまった、その結果、村が分断されてしまったからだと考えられます。例えば下丸子と丸子は、江戸時代以前は下丸子村一村であったものが、江戸初期に洪水による川筋の変化で分断されてしまいました。しかし、かつては一村であったとの伝承意識があったためか、双方の鎮守社には割り竹（一本の竹を割りそれぞれを双方が分け持つ）という習俗が残っています。

また、河川改修によって流路が

多摩川両岸に残る同じ地名



河川改修前の下丸子（地図は明治14年迅速図）